



—世界に飛び出した「秋田人」—

## ルバイヤット詩で知られる堀井梁歩

北条 常久

(あきた文学資料館 名誉館長)

「郷土かるた おらほの仁井田」(平成15年9月、仁井田郷土かるた製作委員会)のカルタの【る】は、「ルバイヤット 訳して知らる 梁歩さん」である。ルバイヤットはペルシア語の古詩の四行詩のことで、日本語に直訳すると「四行詩集」となる。作詩家は、1040年ころ生まれのイラン・イスラム文化を代表するペルシア人、オマル・ハイヤームで、堀井梁歩の訳詩集『異本留盃邪土』から一つ引用してみる。

酒のまぬおのこは好かぬかな  
 同じ屋根の下に寝たうもなし  
 同じ方舟はこぶねに乗り合ふもうし  
 ひたすらに怕るる後の崇りたたかな

イスラム教は酒を禁じているが、彼の詩には酒に関する表現が多く、宗教的束縛から人間性を解放しようとする独自の美の境地を開発している。ヨーロッパ諸国では早くから翻訳され、愛唱されていた。

堀井梁歩(本名、金太郎)は、明治20年秋田県河辺郡仁井田村に生まれ、地元の小学校を卒業し、34年秋田中学入学、39年3月に同校を卒業し、その年の9月に、第一高等学校に入学した。

私が東京大学の教養学部(駒場)で『第一高等

学校一覽』の「第一三冊(明治三十九・四十年)」を見せてもらおうと、「大学予科第一部一年一之組英法科文科」に「堀井金太郎」(秋田)の氏名があったから、第一高等学校に入学したのは確かであるが、同書の「第一四冊」(明治四十・四十一年)の大学予科「第一部二年一之組 英語法科、政治科、英語文科」には彼の氏名はどこにもない。

柳澤七郎『堀井梁歩の面影』(昭和40年12月、いずみ苑)の年譜によれば、「明治四〇年八月第一高等学校退学」とある。私が、さらに東京大学駒場図書館を調べてみると、第一高等学校『校友会雑誌』第一六七号(明治四〇年五月三〇日)の「部報 弁論部」に次のような記事があった。

朗読会「『野分』の一節——堀井金太郎」

さらに、第一高等学校同窓会誌『向陵誌』の「弁論部史」で部員の活動を調べると、一年生は朗読、二年生で演説と記してあったから、一年生の堀井が朗読しているのに不思議はない。しかし、一步踏み込むと堀井が、朗読になぜ夏目漱石の『野分』を選んだかという問題に突き当たる。通常、土井晩翠どいばんすい、高山樗牛たかやまちよきうの作品のように朗読に適したものが選ばれるのが一般的である。漱石の『野分』は朗読にはもっとも不向きな作品である。『野分』の主人公白井道也は雑誌記者で、明治39年8月の東京市の電車賃値

上げ反対の市民運動に加担している仲間の家族を救済しようとする。妻は、夫の行動を社会主義者と間違えられると危ぶみ、意見を言う。しかし、白井は、「間違へられたつて構わないさ。国家主義も社会主義もあるものか。只正しい道がいいのさ」と反論する。漱石が、この種の運動にかかわっている人物を描いた作品は他にない。堀井が、『野分』を選んだ理由を考えると、当時の彼の考えが透けて見える。

明治39年には、日本のインテリ階層に反戦平和運動が広がっていた。その年、徳富蘆花は、日露戦争の勝利に便乗した軍備拡張、植民地支配を強く批判し、軍国主義に反対し、一步誤れば、勝利はたちまち亡国の始まりとなると警告している。蘆花は、悲恋小説『不如帰』で有名であるが、平和主義者トルストイをロシアに訪ねてもいる。『第一高等学校自治寮六十年史』（昭和14年3月第一高等学校編）には「徳富健次郎（蘆花）の〈謀反論〉演説」という章が設けられている。

時の校長は、教育者新渡戸稲造であり、彼の招きによって蘆花は一高で二回も講演を行っている。その講演で蘆花が、「一日も早く平和運動に身を投ずるべきである」と述べたために、「この演説に打たれて、荷物をまとめて寮を去った者が何人もいた」とこの章には記してある。堀井は、すぐ退学はしていないが、明治40年の夏には伊香保温泉に蘆花を尋ね、9月の新学期には彼の氏名が学籍簿から消えている。平和主義に走ったのだろうか。

堀井梁歩は、明治40年帰郷し、家業の農業を継ぎ、新しい農業に関心を抱き、北海道の農場で開墾を学び、アメリカへ渡り、ミズーリ大学農科に学ぶ。

その時の写真が入手できた。この写真は、堀井梁歩の曾孫に当たる桑島生氏が、偶然にもミズーリ大学コロンビア校ジャーナリズム学部に学んだので、曾祖父について調べたところ見つかった記念写真である。彼は現在、フリーのカメラマンとしてロシアで活躍中である。

写真は、上部に「Corda Fratres（コルダフラートレス：ラテン語で『心の通った兄弟達』）Association of Cosmopolitan Clubs（コスモポリタン協会）」というタイトルのもとに、17名の青年男女が4列に並んでいる。写真には、「1907年12月 ウィスコンシン州 マディソンで組織モットーはすべての国家より人間が優先する」とあり、最前列の三人（一人は堀井梁歩）が「A・C・C（コスモポリタン協会）」と描かれた看板を持っている。これは、国際的な学生平和団体の記念写真である。この写真から判断すれば、梁歩は農学を学んでいたのは勿論であるが、徳富蘆花の反戦平和主義に共鳴して、アメリカの大学でも国家より人間が優先することを学び、英語訳でホイットマンやオマル・ハイヤームを学んだものと思われる。

堀井梁歩は、帰国して秋田で「成人教育」と「農業の共同経営」を目標にした雑誌『大道』（大正14年7月創刊12号で終刊）を刊行して、農地開墾や農民運動に熱心であった。しかし、昭和3年には上京して『蘆花全集』の刊行スタッフとなる。蘆花から学んだ反戦平和の思想が、彼の一生を貫いたのである。上京した梁歩は、東大を中退して武蔵野で小作人と共同農場を経営していた江渡狄嶺の近くに住み、彼と肝胆相照らす仲となった。堀井梁歩は、その狄嶺の書架にあったルバイヤットの袖珍本を読み、翻訳することを決意した。